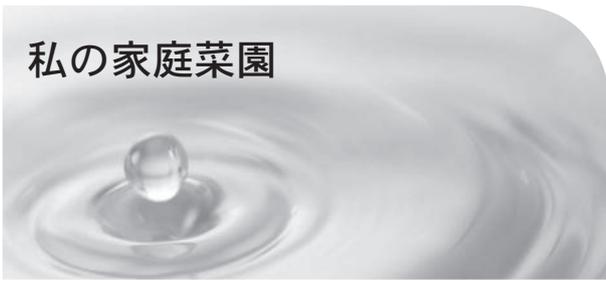


## 私の家庭菜園



深川医師会  
深川市立病院

代田 剛

小さな野菜畑を作っている。畑といっても、分譲住宅地の一画の、住宅が建てられたその残りに作られたものだから、広さは知れている。10坪くらいであろうか。この狭い畑であるが、起こしから最終まですべて人力なので、結構な労力を強いられる。今は家庭用耕耘機が幾つかのメーカーから売り出されている。『女性でもラクラク』が売りである。なのでへそ曲がりの私は買うのを一層遠ざける。あれば楽だろうなと思いながら、行動は起こさない。これは自分の身体のための運動なのだから、と言いつけて。この狭さであるが、実際は一気に耕すことはできない。休み休みやっている。すべて耕し終わったときの達成感は、十分に自分を満足させてくれる。

次に石灰を撒く。撒く前に一つの作業をする。土のPHを測定するのである。これは土を水で攪拌し、上澄みに試験液を滴下し、その比色を見るだけの操作である。科学者（医師は科学的心を修めたものと私は思っている）の端くれなのだから、このくらいはしないといけないと思いついて、行っている。しかしこの結果によって撒く石灰の量を計算したことはない。おまじないみたいなものである。

そして肥料を入れ、種まき、移植である。種から育てるものと、出来合いの苗を買って移植するものがある。種は品種を選ぶだけであるが、苗は品種の他に、その苗が丈夫に育ち、満足した収穫まで行きつける苗であるかを見定めなくてはならない。今や家庭菜園ブームであるから、ホームセンター、スーパー、特設市場でも売られ、選ぶのに迷ってしまう。本や耳学問で一応の知識があるはずであるが、失敗も時々ある。今年もキュウリ1本が枯れてしまい、少しばかり自信をなくした。

後は成長を待つことになるが、収穫までにはたくさんの作業をしないとよい収穫を得られない。まず第一は草取りである。雑草は苗より一般に成長が早いので、除去しないと苗が負けてしまう。農薬を一切使わないのですべて手作業である。そういえば、以前にはちいちゃん（初めての孫ができた時、妻は突然自ら宣言し、この呼び名になった。それはNHK朝ドラ『私の青空』で、おばあちゃん役の加賀まり子が孫から「お珠ちゃん」と呼ばれていたのに倣ったものである）も草取りをしていたが、この数年は全くしなくなった。ちいちゃんが相変わらず

しているのは、収穫とその後の季節を感じながら楽しむ行為である。

こんな調子で書いていると、収穫まで行きつかなくなるので、話を一気に飛ばそう。農薬を使わないので、たくさんの虫が訪れる。青虫、芋虫、毛虫、それにコガネムシやその他の昆虫などである。これもすべて指でつまみあげて処理する。しかし、これらの虫は見れば見るほど美しい。モンシロチョウの幼虫の青虫の、その混じりのない透き通った緑は、この世のものとは思えない美しさである。キアゲハの幼虫の黄緑と橙の模様のコンビネーションの配置の素晴らしさには引き込まれてしまう。毛虫も触れると痛そうに見えるが、手のひらに載せてしまうととてもかわいらしい。コガネムシ類も負けていない。眺めながら見る角度をずらすと、硬い羽根の7色が微妙にずれるのである。これらの虫を葉の上から排除するのは惜しまれるが、残念ながらそのままにしておくことはできない。他にも外敵がいる。カラスである。明日収穫しようと予定していると、その日に熟したトマトやトウキビがやられてしまう。青いトマトや未成熟のトウキビには手をつけないので、一層憎たらしい。

ようやく収穫となる。収穫はすべて盛夏以降である。できたものは旬であり、間違いなく美味しい。小檜山博さんは、自分は農家の息子だから、野菜の旨さにはうるさいと書いていたのを読んだことがある。私の父は農家の息子であるがサラリーマンだったので、私は小檜山さんほど味は判らないだろうが、スーパーや特設市場で売っているものより私が作ったものの方が美味しいというのは判る。それから食べた人たちが美味しいと言ってくれるので、また作ろうかという気持ちになり、続けている。さて今年の出来はどうなるだろうか。

そう言えば、父母が家庭菜園をしていたのを懐かしく思い出す。高校卒業まで一緒に住んでいたが、手伝った記憶は全くない。私の息子も近年家庭菜園をやり出した。彼も高校卒業まで同居していたが、いっさい興味を示さなかった。血は争えない。